

2021年8月22日 投開票日会見 中区山下町 田中康夫選挙事務所
柴田美幸さん提供

お待たせを致しました。今回の横浜市長選は非常に多くの方々にご支援をいただき、とりわけ街頭演説で、静かにたたずみ、そして耳をかたむけ、政策を聞いてくださる市民の方々に、逆に私が、その方々に感銘を受け、また街頭演説を行った後に交わす言葉の中に、多くの方々がこの横浜の、或いは、延いては日本の、閉塞感に覆われた社会を、ともに微力だけど無力じゃない、という心意気を変えて行こう、という、その熱い想いを感じた選挙戦だったと思っています。

しかも、決して抽象的ではなく、より具体的であり、その日本を改める処方箋というものを私が皆様に提示した「12の取り組み」が、よりこの選挙戦を通じて市民の方々から教えられ、より深まったと思っています。よく言われます様に、複眼思考で捉える「虫の目」というものがございます。私は今まで、もういずれの方も鬼籍に入られておりますが、とりわけ4人の作家の方々の警咳に接し、それらの方々から教えられたことが多くございます。お一人は江藤淳さんです。江藤淳さんは私の最初の作品に、「なんとなく」と「クリスタル」の間に「点」が入っている、この「点」が弁証法であり、それは虫の目である、という事をおっしゃいました。

<https://tanakayasuo.me/wp-content/uploads/2021/01/d5a31717d1b5ba4565f86284afeb43e8-1.pdf>

同時に私は、俯瞰的に捉える「鳥の目」というものを今回12の取り組みの中にも盛り込みたいと考えて参りました。そして、延いてはそれは、時代の次の潮流を捉える「魚の目」、この3つが含まれていたかと思っています。12の取り組みであります。それらは個別具体的でありながら、この日本が、あるいは横浜が、今後変わらねばならない、ということを示唆させていただいたと思います。

そして、極めて嬉しかったのは、選挙戦を通じて「立候補をしてくれてありがとう」という言葉をいただいたのは今までの選挙の中でも、今回が初めてであります。そして、勝利を皆様のために得ることは出来ませんでした。多くの方々投票所に足を運び、投票して下さったことに対して、よかった、ありがとう、という言葉が先ほど来、SNSで頂いている事も、これもまた初めての経験であります。

閉塞感に覆われる横浜、のみならず日本は、説明責任がこれまでも求められておりましたし、これからより求められる事であろうと思えます。そして、そのことは同時に、新たな市政を歩み出す事を擁立された

り、支援された方々の製造物責任も、延いては問われることであろうかと思えます。私は遊説中にも幾度か申し上げましたが、2000年に信州・長野県の知事に就任をする時に、亡き母から「あなたは人々から仕えられる存在ではなくて、人々に仕える立場である事を忘れぬ様に」と言われました。それは私の今までの阪神・淡路大震災をはじめとするヴォランティア活動、あるいは著述ということも、それは人々に、ともすれば悲しみや憂いのある方々に、勇気や希望を言葉の力を用いて、一人一人を勇気づけるという事であったと思えます。その活動は今後も変わらないと思っております。

私が警咳に接した方の中に、なかにし礼さんという方がおり、なかにしさんが私の『33年後のなんとなく、クリスタル』を上梓をした時に書いて下さった文章がここに飾ってございました。

<https://yokohama2021.me/pdf/nakanishi.pdf>

なかにしさんは昨年お亡くなりになるまで「日本はもはやアンニュイどころではない、絶望の淵に来ているんだ」という事をおっしゃいました。

<https://tanakayasuo.me/wp-content/uploads/2014/11/1f24380fc24d001f36b505f2113a548f.pdf>

なかにしさんは私の作品の中で「たそがれ」という日本、でも田中康夫は「たそがれ」は「誰そ彼」で、薄ぼんやりとした夕陽の中においては、それが誰だかわからない、それがどういう事象だかわからない、けれども同時にそれは日の出の時は「かはたれ」、彼は誰ということで、視点を変えれば「誰そ彼＝たそがれ」は「彼は誰＝かわたれ」という日の出ともなっていく、という事を教えて下さいました。

城山三郎さんという作家も、私には常に「無所属の時間で生きるということが大事だ」とおっしゃいました。例えば、定年で退職すると、年賀状の数も急に減ってしまい、宴会やゴルフの誘いも減ってしまう。でも働き人間だったので、家の中に居場所が見つからない。その時に、従来の上位下達の町内の集いとは異なるかたちで、それぞれがプライベートな時間に最も、子供の夏祭りはどうするのか、子供の隣町までのスクールバスの時間はもう少し早めた方がいいんじゃないか、という事をビールを飲みながら、ワインを飲みながら話をする。プライベートな時に最も人間はパブリックなことを考えるんだ、というようなことをおっしゃっていました。それは今回選挙戦を通じて、多くの方が駆け寄って来られた。住宅の上から手を振られるだけでなく駆け出して来られる。それぞれ老若男女、立場を超えて無所属の時間で生きている時にこそ、最もこの私たちの社会を心配をし、この社会をより良くしようと思ってい

らっしゃる。そうした方々の気持ちに伝えるべく選挙戦を行い、またそれらの方から、ある意味では、大きな組織がない中において、多くの方々からご支援を頂いたことには改めて感謝を申し上げたいと思っております。

もう一人私を評価して下さった方に、野間宏さんという方がいらっしゃいます。江藤淳さんとはイデオロギーの立場では対極な方でしたが、文藝賞の時に同じく高く評価して下さい、この方は私に亡くなられるまで年賀状に欠かさず、少し手が震えた万年筆の字で「貴方は社会的な物語を書きなさい」という事をおっしゃって下さいました。私は社会的な物語、と呼べるかどうか定かではありませんが、作品を書くだけでなく、阪神・淡路であったり、あるいは信州・長野県知事であったり、あるいは参議院議員であったり、衆議院議員であったり、それは社会にコミットする中で社会的な物語を市民の方々と、国民の方々と一緒に紡ぎ上げた部分はあるかと思えます。今回の横浜も、より今後の横浜の大きな転換点の中で、従来の発想とは異なる指針を示し、そして説明をしていくことが求められると思っております。私は今年の春の『文藝春秋』の本誌2月号

[https://tanakayasuo.me/wp-](https://tanakayasuo.me/wp-content/uploads/2021/01/c4a9fe3fe74f4a78ab9d6a3a95cf7988.pdf)

[content/uploads/2021/01/c4a9fe3fe74f4a78ab9d6a3a95cf7988.pdf](https://tanakayasuo.me/wp-content/uploads/2021/01/c4a9fe3fe74f4a78ab9d6a3a95cf7988.pdf)

に書きましたが、『あんばい村 かわたれ国』という長編を今書いております。それは、南半球の“まあある大きな島”の寓話的な話であります。が、「あんばい」というのがとても大事でして、数字のスペックだけでは示せない人間の「あんばい」こそ五感であろうと思えます。その五感を駆使して、「あんばい」は、なあ-なあではなく数字に表し切れない私達の心の中のものを言葉によって、そして「かわたれ」ということが黄昏ではなく光に向かって行く、新しい夜明けの光を、という物語であります。この作品を引き続き仕上げるとともに、「アンガージュマン」という社会にコミットしながら、発言をする、というのがジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールが述べた言葉であります。その「アンガージュマン」の一人として、この横浜の街を、あるいは日本を、作品を通じて、あるいは言葉を通じて、行動を通じて、今後も皆様とともに考える、そして行動して参りたいと思っております。本日は大変にありがとうございます。

*「40年後のなんとなく、クリスタル」まとめサイト

<https://tanakayasuo.me/crystal/footnote>

<質疑応答>

Q: 読売新聞の記者で村尾潤と申します。選挙戦大変お疲れ様でした。選挙戦を総括していただいたかと思うのですが、「鳥の目」という言葉もございましたが、今回の選挙の正しさプラスマイナス、或いは横浜、国政、今どの様に捉えていらっしゃるでしょうか？

田中康夫: 民信無くば立たず、という言葉がありますので、民信無くば立たず、というのがある意味では飽和点に達しているのが今の日本の社会、或いは横浜もそうであろうかと思えます。そして、その中で多くの方が投票所に向かわれたのだと思います。であるならば、より今後の市政というものは冒頭でも申し上げた通り説明責任や製造物責任という事が問われるのだろうという風に思えます。それが結果として、多面的に、俯瞰的に見るという「鳥の目」になるのではないかと思います。

村尾潤: 政党同士の争いについては、何かご感想はございますか？

田中康夫: 私が知事の時に、私は信州・長野県の財政改革や福祉・医療・教育の充実とともに、信州・長野県を良い意味でチェスの色を変えるように行うべきではないかということで新党日本というのを2005年の時に現職の知事であって党の代表になりました。その時には、少なからずマスメディアの方から、地方自治に国政を持ち込むな、というお言葉を頂戴したのを覚えております。今回は、横浜の市政には問題が山積でして、待機児童も中学校の学校給食も、独居の高齢者が3人に1人いるという事や、その他の不透明な、横浜版モリカケの様な（旧市庁舎売却）事案というもの、これらを皆様がどのように判断するかという事が、今回の待ったなしの市政の投票のアジェンダ（議題）であったと思いますが、他方で、与党と野党の代理戦争的なものがこの市長選で持ち込まれたという事も皆さんが報じられているところだろうと思います。それをどのように判断をするのかという事が今後新しい市政の中で問われて行く事だろうと思っております。

村尾潤: もう一点だけ、一人一人を勇気づける活動は今後も変わらない、というお話がございましたが、地方自治および国政に関する活動というのは今後もまた継続のお考えはあるのでしょうか？

田中康夫: おそらく多くの方が、投票に行かれる、今回は少し投票率が上がった様であります、昨日もたまプラーザで申し上げましたけれ

ども、社会に対して意識があるからこそ、敢えて投票に行かれなかった方々が今までいらっしやたかと思います。そしてそれは国政においては、選挙の制度を変えることが政策本位の世の中になると、随分と前に言われたのですが、小選挙区制導入の時に、決して形を変えても意識が変わらなければ元の本阿弥だったと言う事にして、むしろ私は地方自治にこそ、制度云々の前に人々の意識と職員の意識、また首長の意識がその街のあり方を問う形の中で、良い意味で、非常に目に見える形で変化が起きると思っております。国政はその上で、私は結果として、旧態依然たる制度や仕組みが変わって行くことかな、と思っております。司馬遼太郎さんがおっしゃった「この国のかたち」と言うのは、形の順列組み合わせではなくて、この国の本来のあり方を捉えていたんだと思います。あり方を変えるにはやはり一人一人に届く言葉を伝える事が大事だと思っております。ですから、私はここまでの現場というディテールにこそ変革の鍵があると思っております。

Q: フランス 10 の及川健二と申します。19 日、20 日の朝日新聞の情勢調査では田中さんは 1% ぐらいの支持率でした。それが、まだ開票中とはいえ、NHK の出口調査では 3 位にまで付けていらっしやいます。急激に支持が拡大したと思えますが、それについてどの様にお考えか、お願いいたします。

田中康夫: 捉え方であろうと思いますが、固定電話だけでは中々世論が測れない、という事でメディアの方々も切歯扼腕されている中で、固定電話の限られた (1000 人という) 数字によって、今、及川健二さんにご質問になられた当初の報道があったのだらうと思えます。ですから私は、街を歩いていて、当初からこの閉塞感の横浜を一緒に変えようという意思表示を (市民の方々には) されていたと思えますので、今の及川さんのご質問の様な捉え方とは私は少なからず違います。

及川健二: ありがとうございます。

Q: タウンニュースの利根川真紀と申します。

田中康夫: 横浜の街には非常に可能性があるわけですが、しかしながら、その可能性が眠ったままであると思えますし、また、その可能性は何をやる、何をやらない、というような〇×式な形だけでは可能性が花ひらくという事はあまり期待できないのではないかと思います。ですから、〇×式な発想ではない形の、まさに申し上げた、この国の、この地

域のあり方ということが一人一人の市民の方、私もその一人の市民ですから、そのことを考え、そして行動することが、次の横浜の充実に繋がると思っています。

Q： 東京新聞の村松権主磨と申します。まず、今回善戦されたと思うのですけれども、当選には至らなかったことに対する率直な感想を伺いたいのですが。

田中康夫： それは、すべての投票所に行かれた方々に私は、期日前投票も含めて、感謝をしておりますし、その中で私の名前を書いた方々にも感謝を致しますし、そして、その結果として、現在皆さんが報道されている形になっている訳ですから、それに関して、一候補者である人間がこの段階で何か分析をする、というのは差し出がましいのではないかと思います。

Q： クミチャンネルの小山久美子と申します。大変残念だったのですけれども、私どもが心配しておりますのは山中さんご自身の力と言うんでしょうか、巨大な横浜市の市政をハンドリングできるのかな、という事。あとは、医療業界の方からお金が入っていたりして、色々暴走みたいなことをするんじゃないかという心配があります。今後、何か、よくない事が起きてきた時に田中さんの方から、立憲民主党の方に働きかけたりとか、何かしら横浜市民のために歯止めになっていただく術はあるんでしょうか？

田中康夫： ご質問の趣旨が今ひとつ判然としないのですが、冒頭でも申し上げたように、それぞれリーダーというものは説明責任が必要です。現在、日本全体が説明責任が曖昧な状況にありますけれども、横浜においても説明責任が必要ですし、同時にそれは、先ほど申し上げたように、擁立をされたり、賛同された方々、或いは、もちろん一票を入れた方もそうですが、その方々に PL 法の製造物責任がありますから、むしろそれらの方々が、今ご質問になった個別な内容に関しては、私はあまり把握はしておりませんが、私は組織選挙ではなく、一人一人の市民の力によって多くの票をいただきましたが、いわゆる私とは対極の組織選挙をなさった方々は、より製造物責任を果たすということが、有権者に対しての責任じゃないでしょうか。

Q： 週刊現代の小川匡則と申します。今回政策を練って臨まれたと思うのですが、市民と対話されて新しく見えてきた課題、問題意識みたいなものがあれば教えていただきたいのですが。

田中康夫： 皆さん、現場にお越しになった方は、私が 40 分 50 分話すので痺れを切らして途中で他の取材もあって他の場所に辞去された表現者（マスメディア）の方もいらっしゃると思いますが、動員をしているわけでもなく、最初は私どものスタッフ以外は数人であるものの、最後に 80 人、100 人、あるいは最終日には 600 人というかたちで立ち止まられて、そしてそれを 50 分なり、じっとお聞きになる。むしろ、その方々に届く言葉が今までの政治や行政に希薄だったから、かも知れませんが、私の述べていることに 100%は賛同しなくても大元の部分でおそらく今までの行政や政治とは違うディスクールと言いますか、を行おうと、今までもしてきましたし、今回もしましたし、あるいはこれからもする、という事に関して、心を動かしていただいた方々がいらっしゃることは、これは私にとっては、立候補した冥利に尽きるという事だと思っております。そしてそれが、冒頭で申し上げた様に「立候補してくれてありがとう」という、或いは今回も「戦ってくれてありがとう」という言葉、今までの知事選や国政選挙ではあまり経験したことがありませんので、それは非常に、横浜の方々の閉塞感に覆われた社会の中での心の叫びだと思っております。その叫びに、私はこれからも、多岐な活動の中で、微力ながらもお応えする事ができるのではないかと考えています。

会見分数：27分10秒

会見動画

<https://www.youtube.com/watch?v=BRN6zHvyKBI>